

教材設計科目におけるフィードバックの効率化および 添削者育成のための添削フレーズ集の試作

Prototype Development of Phrase Collection for Efficiency of
Feedback Making and Succession Planning in an Instructional Design Course

石田 百合子 平岡 斉士 鈴木 克明

Yuriko ISHIDA, Naoshi HIRAOKA, Katsuaki SUZUKI

熊本大学教授システム学研究センター

Research Center for Instructional Systems, Kumamoto University

〈あらまし〉 教授設計を学ぶ科目の提出課題に対する添削作業の効率化と添削者のスキル育成を目的に、添削フレーズ集を試作した。熟練者による過去の添削データを活用し、添削チェックリストの各項目に対応するフレーズを集約したことで、初任者が当該フレーズ集を参照しながら、熟練者によるダブルチェック前の課題添削文案を一通り作成できるようになった。今後も当該フレーズ集の改善を進めることで、添削者のスキル育成とジョブエイドとしての質向上が期待される。

〈キーワード〉 OJT, ジョブエイド, 高等教育, 添削スキル, 添削効率化

1. はじめに

教授設計を学ぶ科目(インストラクショナルデザイン I ; 以下「ID 1」)の提出課題に対する添削作業の効率化と添削者の添削スキル育成を目的として、開発済の添削チェックリスト(平岡・鈴木,2016)の各項目に対応するフレーズを集約したジョブエイドとしての添削フレーズ集を試作した。本稿では、3つある課題の1つ「教材企画書・前提テスト・事前/事後テスト・アンケート(課題1)」の添削フレーズ集について、その試作の意図と期待される効果について述べる。

2. ID 1 の概要および問題点

2.1 科目概要

ID 1 は、独学用教材の作成を通じて教授設計スキル修得することを学習目標とした、フル e ラーニング科目である。15 回の授業を通じ、3 回の課題提出および教員によるフィードバックを経て、学習者が自由に選択したテーマで、1 時間程度の独学で学習できる紙教材を完成させる。

課題 1 は、教材設計企画書・前提テスト・事前/事後テスト・アンケート、課題 2 は指導方略表・課題分析図・教材のサンプル、課題 3 は完成した教材・形成的評価の道具・教材設計報告書で、各課題に合格しないと次の課題の提出はできない。課題が合格基準に達していない場合、「合格の条件」とアドバイスとともに再提出が課せられる。

2.2 課題添削の特徴および問題点

ID 1 の課題添削は、学習者ごとにテーマが異なる提出物に対し、前述の添削チェックリストによる一定の基準で評価を行い、問題点の指摘と改善のためのアドバイスを中心としたフィードバックを行うことに特徴がある。

フィードバックのための課題添削文の作成は、5 つのステップを経て行われる(① 提出物の形式チェック, ② 問題点の列挙, ③ 問題が生じている原因の特定, ④ 添削文作成(1): ①から③の問題点の指摘, ⑤ 添削文作成(2): 修正・改善に向けてのアドバイス)。④および⑤は、指摘事項を簡潔に漏れ抜けなく示す要約力や、学習者が迷わず一人で修正作業に取り組めるよう、学習者の文脈に沿った例示をしながら分かりやすく道筋を示すなど、教授設計の知識以外の高度なスキルと経験が求められる。従来は 2 名の科目教員が、それぞれ添削者、熟練添削者の役割を担い、添削時は OJT (on the job training) を兼ねたダブルチェックを行ってきた。しかし、1 名分のフィードバックを作成するのに、2 名の作業合計時間は 1 - 3 時間を要していた(平岡・鈴木,2016)。

2020 年度から ID1 単位取得者である教員(第一筆者)が、新たに担当教員として加わった。これまで熟練添削者であった教員はスーパーバイザー、添削者だった教員が熟練添削者、新規担当教員が添削者の役割を担うことになった。

開講前段階で添削者は、添削チェックリストを確認しながら、過年度提出の課題1のプレ添削を試みた。しかし、課題添削文の作成ステップ①から③の作業はスムーズに進むものの、④以降は手が止まってしまう状況が続いていた。ID1の3つの課題は連続性を有しており、合格しないと次の課題に進めない構造になっている。そのため、担当教員からのフィードバックの遅れは、学習者の学習スケジュールにも大きく影響する。そこで、添削者育成のためのOJTとしての機能を維持しつつ、添削作業の効率化を高めるため、新たにジョブエイドとして活用することができる、添削フレーズ集を作成することにした。

3. 添削フレーズ集の作成手順

添削フレーズ集の作成は、添削者のOJTを兼ねて第一筆者が行った。以下に添削フレーズ集の作成手順を示す。

- (1) 添削者が、前述の添削チェックリストの各チェック内容にナンバリングを行った。続いて各チェック内容のうち、チェック結果の判断や課題添削文作成の際、スキルが必要と思われる項目に丸をつけ、熟練添削者がダブルチェックを行った(表1)。
- (2) 2019年度(前期・後期)のID1の課題1提出者30名に行った課題添削文を段落毎に分けてすべて抽出した。(179項目)
- (3) (2)で抽出した課題添削文を、添削チェックリストのナンバーでラベリングし、ナンバー毎に課題添削文を集約・整理した。その過程で、スキルを必要しないチェック

内容は、よく使われるフレーズは指摘事項のパターンに分けてテンプレート化した。スキルを要するチェック内容は、添削者の現時点のスキルでは分類が難しいため、抽出されたフレーズを全文掲載した(図1)。

4. 使用方法と期待される効果

添削者は、添削チェックリストを用いて提出物をチェックし、作成ステップ①から③に関連する指摘事項を箇条書きする。その際、対応するチェック内容ナンバー(A-1～G-2(表1))も記載する。次に、箇条書きした指摘事項およびチェック内容ナンバーを添削フレーズ集と照らして、修正・指摘事項と近いフレーズを探し出し、課題添削案を作成する。熟練添削者は、添削者が記入した添削チェックリストを確認し、特にスキルが求められる内容を中心に、課題添削文のチェックおよびコメントを行う。これにより本稿執筆段階では、2019年度までのダブルチェックで要した時間内で添削作業を終えられている。今後も、添削者が添削フレーズ集を更新する予定である。特に、スキルを要する部分のフレーズのカテゴリ化を進めることは、添削者スキルを高める機会にもなり、ジョブエイドとしての質向上も期待される。

参考文献

平岡齊士, 鈴木克明 (2016) 「教材設計企画書の点検効率化のためのチェックリストの開発-評価方法の見直しとチェック項目の再設計-」, 教育工学の研究, 教育システム情報学会 第41回全国大会発表論文集, 257-258

表1 添削チェックリスト(教材企画書)(抜粋)(平岡, 鈴木(2016)を一部改訂)

項目	No.	チェック内容	選択	スキル
内容 選 択 の 理 由	3. 短時間で学習できるか?	C3-1 条件3「短時間(1時間)で学習できる内容・分量になっているか」が記載されているか	ある/なし	
		C3-2 1時間で学習できる内容・分量になっているか	OK/NG	○
	4. 個別学習教材で、教材が「独立」できるか?	C4-1 条件4「学習者が自分の出来具合を確認しながら一人で学習が進められるか」が記載されているか	ある/なし	
		C4-2 学習者が独学するための環境(教材で使用する道具や設備など)は問題なく準備出来るか	OK/NG	
	C4-3 独学教材であるのに学習中に第三者の支援を想定していないか	OK/NG		
	C4-4 教材だけで学習目標を達成できる根拠が明確に記載されているか	OK/NG	○	

C2-1 条件2「教材で教える内容を理解していない人(教材で学ぶ必要のある人)を協力者として確保できているか。もしくは確保できる見通しがあるか」が記載されているか

パターン1: 「協力者」を誤解している
教材企画書の3. 選択の理由の2)は、「○○○○」に協力してもらおうと書かれています。協力者は、今回教えたいと思っていることを「実際に学ぶ必要がある人」のことです。

※上図はテンプレート化の例、右図は抽出フレーズ全文掲載例

C4-4 教材だけで学習目標を達成できる根拠が明確に記載されているか

内容選択の理由4は「重要な事は、個別で学習を進める事を前提で作成するため、個別学習は可能である。」と書かれています。これは「できるようにするからできる」と述べているだけであって理由になっていません。ここでは教材が独立立ちできるという根拠を述べてください。

教材選択の理由4が「合格基準とテストの採点基準を明示し、自己採点可能なテストにして、教材の「独立」を目指す」となっていますが、これはこの科目で設計する教材すべての前提であり、「この教材」が独立立ちできる理由になっていません。修正してください。

図1 添削フレーズ集(抜粋)